

□寄稿□

国際医療福祉大学大学院—医学研究科の設置とその展望—

三浦 総一郎¹

国際医療福祉大学大学院は、我が国の保健・医療・福祉の分野で指導的な役割を果たすことができる高度医療福祉専門職の人材の育成を目的に1999年に開設されました。来年ちょうど開院して20周年の記念すべき年を迎える予定です。現在我が国では、少子高齢化と国際化の波が急激に押し寄せており、社会構造や社会システムに急激なパラダイムシフトが生じています。このような社会の中では、労働人口の低下をカバーしつつどのように着実に生産性 (productivity) や創造性 (creativity) をしっかり維持・向上させて我が国の存在意義を高めてゆくかが、大きな課題となってゆきます。そのような背景を踏まえて近年我が国においては、高度な専門性と国際競争力を身につけた人材を多く生み出して、知識基盤社会を形成する必要性が叫ばれており、大学院教育が社会的なニーズとしてクローズアップされて参りました。それを実現するために、1) 社会人にいかに高度な専門教育の機会を提供するか、2) いかに広範囲な専門職を有機的・効率的に結びつけ機能させるか、3) いかにして国際性を有した人材を育成するかの3つが、鍵を担う重要なアイテムとなるのではないかと思います。

私は昨年6月に本学大学院長に着任したばかりですが、大学院においてこれらのキーワードを開設当初からしっかり意識して取り組んできた歴代の大学院長をはじめとする大学首脳陣の先見性により、今日の繁栄を享受することができたのではないかと考えております。すなわち、仕事を持つ社会人にも働きながら学ぶ環境を提供し指導的役割を担う人材が育ってほしいと考え、各キャンパスを同時に双方向でつなぐ遠隔授業システムやe-learningなどITを駆使してシステム環境を整備したこと、平日の夕方から夜間、週末を使った

授業スケジュールを組んだことなど、社会人の便宜を最大限配慮した他に類をみない大学院となりました。現在では、在校生の7割以上が仕事をしながら大学院で学んでいる状況であります。

また本学大学院は、開設以来医療分野において必要とされる新しくユニークな分野を常に開拓し、大いに学際性を高めるとともに、多彩な領域におけるオピニオン・リーダーを育成してきました。その歩みを振り返ると、開学2年後の2001年には保健医療学専攻に博士課程を加え、医療福祉経営専攻を開設し、2009年度には薬科学研究科を、2012年度には薬学研究科をスタートさせるなど順調な歩みをみせ、2018年3月の卒業生まで修士・博士課程合わせて3,000名を超える卒業生を送り出しております。その中には、アジアを中心に150名以上の外国人学生が含まれており、その母国での活躍は我が国の国際貢献に大いに役立ってきたと考えております。

特徴あるユニークな分野の開拓としては、全国でも数少ない生殖補助医療胚培養分野、我が国初めての医療福祉ジャーナリズム分野や診療情報アナリスト養成分野、全国に先駆けた特定行為看護師養成分野、医療経営管理分野やヒューマンヘルス関連のMBAコース、介護ケアマネジメントの基礎および実践を学ぶ先進的ケア・ネットワーク開発研究分野、最近では医療通訳・国際医療マネジメント分野を新設するなど枚挙に暇がありません。本年4月には新しい分野として遺伝カウンセリング分野や災害医療分野が始まりました。また、多彩な分野間における積極的な交流を大いに促進したいと考えており、それを通じて研究の学際性を高めてもらいたいと望んでおります。

2018年は、本学大学院にとって特別なエポックメー

¹ 国際医療福祉大学 大学院長

キングな年となりました。すなわち、本学大学院は、本年4月には成田の医学部と連携して医学研究科を新設し、同時に大学院の東京のキャンパスを青山から赤坂の地に移転し、新設の赤坂心理・医療福祉マネジメント学部とともに新たなスタートを切りました。医学研究科は医療福祉学研究科、薬学研究科、薬科学研究科に続く本学大学院の4番目の研究科で、4年制の医学専攻（博士課程）と2年制の公衆衛生学専攻（修士課程）を擁しております。ご存知のように、本学が2017年4月に成田市に開設した医学部医学科は、国内外で活躍できる医師養成をめざし国内のみならず海外にも多くの医学教育拠点を設ける計画を有しておりますが、それと同時に医学部医学科開学後の国際的な産官学連携活動を支える研究者の育成に期待が寄せられています。本学が医学部医学科新設のために整備した教育研究環境は、国際的に活躍するリーダーシップを備えた医学研究者や高度専門職業人をめざす大学院学生が学ぶ環境としても準備されており、医学部医学科と一致連動して、国内のみならず留学生の母国を含む海外の国・地域にとっても、医学に関する教育研究の質の向上を図ることが可能となると期待されております。

先程大学院教育のニーズについて述べましたが、それにもかかわらず我が国においては医師の地域的・専門診療科偏在という社会的に解決すべき課題とともに、特に臨床に携わる医師の研究志向の低下とそれに伴う研究医不足が指摘されております。医学研究者となる医師数が継続的に減少している状況では、臨床研究や橋渡し研究力の低下の危機のみならず、将来の医学教育の質の低下をもたらす危険性があり、医学部を有する大学が、医学研究科を設置してこれに取り組むのは喫緊の使命といえましょう。しかし研究者が複雑な課題に対応するためには、専門知識の修得のみならず、課題に対する解決能力やコーディネート能力が問われており、単に研究者不足を補うというスタンスではなく、本学ならではといえる能力の高い専門家の育成をめざすべきであると思います。また2020年に開院を予定する成田病院を含む本学の5つの附属病院や

多くの関連施設においては、各診療科の専門医を輩出する必要があることから、前述の研究者養成の必要性と同時に、高度の専門職業人として優れた研究能力を備えた臨床専門医の養成が必要であり、その意味でも医学研究科の早期の設置が必要であったと認識しております。さらに、本学では国際交流についても積極的に行っており、ASEAN諸国を中心として41にもおよぶ多くの医育機関や医療福祉施設等と学術交流に関する協定を締結し自国で将来リーダーとなる人材を育成するとともに、各国への医療協力も行ってきた実績を有しますが、海外の政府、医科大学との協議等において、先方から自国の教員養成のために博士課程の学生受け入れについての要請も度々受けております。特に、感染症、国際協力、医療政策、医学教育の分野での研究指導を望む声が多く聞かれ、これらの研究分野に関する医学研究科への受け入れは、海外医療機関の質的向上のみならず本学医学部の教育研究環境整備の向上にも大いに資すると考えております。

現在、多職種連携（Inter-professional Collaboration）によるチーム医療は、臨床現場で全国的に広く定着していますが、やはりチーム医療の司令塔の役割をはたし、リーダーシップを発揮しなければならないのは医師あるいは研究科の卒業生であり、医学の分野におけるハイレベルな教育・研究が推進できることは臨床現場への還元が非常に大きいと考えます。したがって、医学研究科の開学により大学院全体のアカデミックな国際競争力も格段にアップし、医学部のみならず他学部や他学科、ひいては本大学全体のレベルアップにつながると自負しております。そういう意味からも、医療プロフェッショナルリズムをしっかりと実践できる人材として大学院生を育成する必要性を認識しております。

ここで医学研究科の教育内容についてその概要を紹介したいと思います。成田に開学した医学部の先生方を中心に全国の付属病院や関連施設の先生方に指導教授陣として参加していただき、充実した教育を提供できる体制を整備しております。医学専攻では、国際医

療福祉大学ゲノム医学研究所長でもある辻 省次先生が専攻主任を務め、3つの主要な分野である基礎医学研究分野（分野責任者：潮見隆之先生）、社会医学研究分野（山崎 力先生）、臨床医学分野（畠 清彦先生）において合計44の専門科目を用意して教育に当たっております。

ここでは、国際的に活躍できる幅広い視野を持った医学研究者と高度な専門職業人の養成をめざし、最先端研究を展開するための医療系総合大学研究拠点（知の拠点）をめざしております。とくに国際的研究の活動拠点として機能したいという意図で、各授業科目を通じて英語運用能力の向上も図っていくプログラムを組んでおります。基礎医学研究分野では、単なる基礎医学の学術的貢献にとどまらず、診療現場の疑問を解決する「トランスレーショナルリサーチ」の実現をめざしており、社会医学研究分野では国際社会・地域社会の健康増進や国際感染症への対応、保健福祉の向上、医学教育の発展に貢献できる研究者を養成したいと考えております。臨床医学研究分野では、ゲノム医療、がん医療、再生医療など注目を集めている分野での先進的臨床研究を推進するとともに、国内外の臨床研究を進展させ、遠隔画像診断や医療機器・医学教育機器開発などにも取り組みたいと思います。

さらに医学専攻では公衆衛生学専攻の協力を得て、希望する学生を対象に分野横断型の医療国際協力、感染症研究、医療政策研究、医学教育研究の4コース（コース系科目）を用意し、より幅広く学びたい学生への教育プログラムを提供しています。この分野横断的に選択できる4コースを受講して条件を満たした学生にはコース修了認定証を発行し、そのキャリア形成に役立つようにと考えております。

公衆衛生学専攻は公衆衛生大学院であり、MPH (Master of Public Health) の学位が修了時に取得できます。ここでは池田俊也先生が専攻主任となり、国際保健学（分野責任者：松本哲哉先生、国際保健領域と感染症領域）、医療福祉管理学（武藤正樹先生、医療福祉政策学領域、医療福祉経営学領域）、疫学・社会医学（中田光紀先生、疫学・生物統計学領域と社会医学

領域）の3分野で6領域を用意して教育に当たっております。また今後は新たに医療福祉データサイエンス領域の開設を計画しております。東京赤坂キャンパスでは医学・公衆衛生学における医療経済研究や臨床疫学研究、医療ビッグデータの解析など幅広い専門性を持つ多数の専門家を擁し、成田キャンパスでは国際保健に関する諸外国との共同研究や感染症国際研究センターとの連携による感染症研究も可能であり、グループの多様な機関や施設を活用した充実した教育管理体制をとっております。特徴的なのは、米国公衆衛生大学院の認証機関である Council on Education for Public Health (CEPH) の基準に則った教育カリキュラムを提供していることで、これにより MPH に必要な8つのコア・コンピテンシー（公衆衛生のエビデンスに基づくアプローチ、公衆衛生と医療制度、健康増進のための計画とマネジメント、公衆衛生政策など）の修得を実現できます。修了要件として修士論文を含む42単位の修得が必要で、ややタイトなスケジュールとなりますが、社会人学生にも対応した教育環境が提供されており、働きながらの修得が可能となっております。

先程、本学大学院においてがん医療にも積極的に取り組みたいと述べましたが、本学では約10年前から文部科学省採択事業としてがんプロフェッショナルを養成するプランに積極的に参画しており、本年度からは「未来がん医療プロフェッショナル養成プラン」として医学研究科を含む大学院の広い範囲の修士・博士課程にも拡大して開講し、多くの受講者を迎えスタートしております。

2018年の5月末現在、医学研究科は発足以来2か月を経過し、医学専攻および公衆衛生学専攻ともに定員を大幅に上回る新入生を迎えることができ順調な滑り出しを果たし、活発な教育・研究活動を始動しています。4月初旬に各キャンパスで学部入学式とともに大学院入学式（図1、図2）を執り行いましたが、私から「医学・医療の分野は日進月歩であり、新しいものを作り上げる創造性が求められる。ここから未来に向かって重要な情報を数多く発信してください」と

スピーチし激励させていただきました。医学専攻では国際的に活躍できる医学研究者および専門医や行政官等、高度専門職業人を目標として、一期生は留学生2名を含む26名の方が入学し、幅広い分野の医学研究を開始しており、公衆衛生学専攻も留学生3名を含む医師、保健師などの医療職をはじめさまざまなバックグラウンドの15名の方が入学し、今後の成果が大変楽しみであるとともに、教員も非常に良い意味での刺激を受けております。

今後医学研究科では、研究指導教員の Faculty Development (FD) や学生の研究報告会など様々なイベントが予定されており、9月にはオープンキャンパス

が予定されています。既存の研究科や医学部・附属関連施設と協力しながら、将来的には世界に冠たる新しい国際的な知の交流拠点、すなわちアジアでの知のハブ機関として認識され機能したいと考えております。そうした観点から医学研究科では、今年度 IUHW 奨学金制度により医学専攻にベトナムから1名、公衆衛生学専攻にベトナム・モンゴルからそれぞれ1名、合計3名の奨学生の方々を受け入れました。先週も成田キャンパスで開催された大学全体での留学生歓迎のパーティー(図3)で歓談しましたが、皆さん大変意欲的で目の輝きが素晴らしいと感じました。彼らが、大学院のキャンパスライフをエンジョイし、将来医療



図1 東京赤坂キャンパス入学式にて誓いの言葉を述べる松岡亮介さん(大学院医学研究科)。広報誌 IUHW113号より許可を得て転載。



図2 大川キャンパス、福岡キャンパス入学式にて誓いの言葉を述べる元木文子さん(大学院医学研究科)。広報誌 IUHW113号より許可を得て転載。



図3 成田キャンパスでの留学生懇親会。医学研究科の IUHW 奨学生とともに、左から三浦、吉田素文先生、ファム・ズンイエン・ビンさん(医学専攻、ベトナム)、ホン・フック・ルさん(公衆衛生学専攻、ベトナム)、オダマア・ガンゾリクさん(公衆衛生学専攻、モンゴル)、池田俊也先生。

福祉の分野で母国の発展に貢献できる人材として成長されることを期待しております。

ドイツの格言に「*Aller Anfang ist schwer*」という文句があります。何事も初めが困難であるという意味ですが、*schwer*は重いという意味もあるので、初めがとっても肝心ということも示唆しているのではないかと私は解釈しております。医学研究科のスタートはまさに、この言葉のとおりで、これからの長い道のりへの貴重な一歩であるとともに、新しい歴史の方向性を決定す

る大変重要な作業であると、教職員一同と心を引き締めて取り組んでおります。大学院は未来への学術的イノベーションの推進をめざすとともに、多くの人々に愛され信頼される機関として成長したいと望んでおりますので、是非、この志に賛同される方は研究科とともに学び研究する仲間となっていただきたいと望んでおります。そして最後に国際医療福祉大学学会員の皆様のご協力とご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。